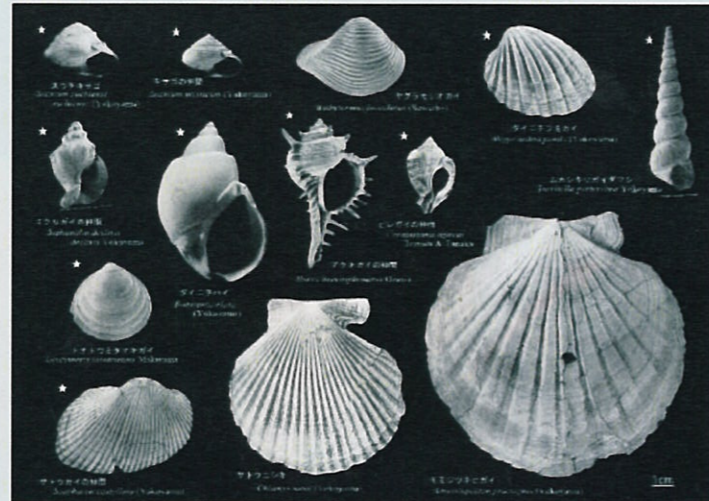


大日の貝化石動物群

- 大日層は、森町～掛川市北部にかけて分布する約200万年前の砂岩層で、貝化石を豊富に産出することで全国的に有名です。
- 大日層は1925年に京都帝国大学の横山次郎教授により命名されましたが、大日はその基準となった大切な場所（模式地）です。
- 大日層は、現在の遠州灘のように、暖流あらかう外海の沿岸で堆積しました。200万年前は温暖化の時代で、海面が上がり陸側に海が進出してきました。



Ozawa et al. (1998, Nagoya University Furukawa Museum, Special Report no. 7)より抜粋



宇州川源流付近の大日層

大日層産の代表的な貝化石 (☆は、大日層産の標本が分類の基準となっている種)

- 大日層は、ダイニチフミフミガイ、スウチキサゴなど、数多くの絶滅種の模式標本（分類の基準となる重要な標本）を産したことで有名です。
- これらの種は、かつて西南日本の太平洋側に広く分布していましたが、寒冷化とともに滅びてゆきました。この貝化石群は「掛川動物群」と呼ばれており、気候変動や生物進化などを研究・学習する上で大切な自然遺産です。

遊家の貝化石層

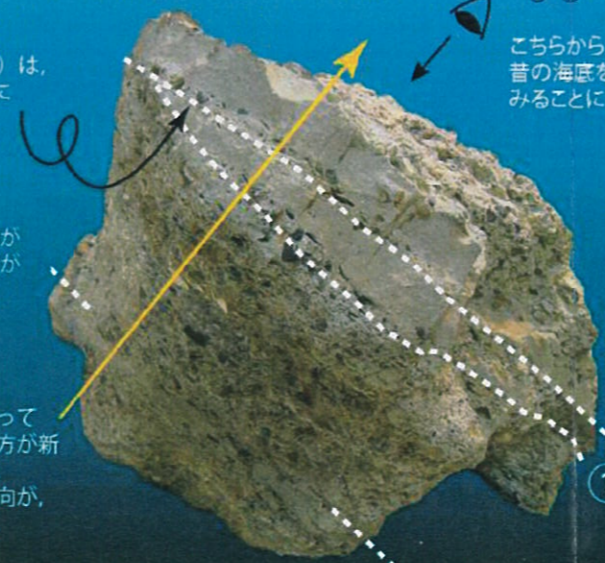
展示標本は、写真の例と同じ産地から採集しました。

～200万年前の海底を見てみよう～

れきや貝殻がなす列（-----）は、それらが堆積したときの海底にあたります。

この面では、れきや貝殻のならぶ層が何枚も積み重なる様子が見られます。

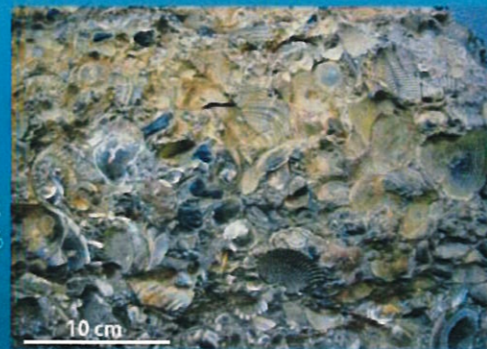
②の層は①の層を切っているの、②の層の方が新しいことになります。つまり、黄矢印の方向が、「上」側になります。



50 cm

こちらから見ると昔の海底を真上からみることになります。

たくさんの貝殻が海底に折り重なるように横たわっています。



10 cm

- ・キサゴやサトウガイの仲間など、沿岸砂底にすむ種類が多い。
- ・二枚貝の二枚の殻ははなれており、破片も多い。
- ・殻は溶けているが、その印象型をみると、殻表面の彫刻がきれいにのこっているものが多い。
- *死後、海底に長い間さらされて摩滅しなかった。

これらのことから、「沿岸にすむ貝類が、すんでいる場所から、砂や礫とともに運ばれて、すみやかにうめられた」と考えられます。